ソードアート・オンライン　仮面の騎士

ジ・アンサー団

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺はシュウ

神の失敗で転生させられた転生者だ

俺の特典はこの世界ではかなり強い特典を身に着けた

身に着けた俺の特典はペルソナ、自分の心と向き合ったら現れる自分の感情

俺はこの特典で未来を切り開く

目次

プロローグ
転生・バトル ―― 1
逃げ出さない1人の神
月夜の黒猫団　part1 ―― 7
月夜の黒猫団　part2 ―― 12
月夜の黒猫団　part3 ―― 15
月夜の黒猫団　part4　FINAL ―― 18
取り戻す、一人の勇者
ピナの心　part1 ―― 21
ピナの心　part2 ―― 24
ピナの心　part3 ―― 27

プロローグ
転生・バトル

「う・・・ん」

　俺は目を開けたら周りが宇宙が見える

「此処は何処だ」

「神様の部屋じゃ」

　後ろから誰か聞こえて後ろを向いた。向いたその先には一人の幼女がいた

「誰が幼女じゃ!!誰が!!」

「お前だよ」

「失礼じゃな、儂は神様じゃよ」

「だから何？幼女が俺に何の用だ」

「なんじゃと!!?、まあいい、お主に言いたい事があってな」

「言いたい事？」

　そう言ったら幼女がいきなり土下座をした

「すまなかった!!」

「頭を上げろ、っでどうした急に？」

「実はお主を殺してしまったのじゃ」

「ああそう、・・・で？」

「で？」

「お前が俺を殺して何の意味がある？、お前は誤って何の意味がある？」

「え？」

「意味の無い、事はどうでもいい、誤って何が起こる？」

「お主を転生させるのじゃ」

「分かった、で、転生先は？」

「お主が知っている、ソードアート・オンラインじゃ」

「・・・死ぬぞ、俺」

「安心せい特別に特典を用意している。その特典で頑張ってくれ」
「何個ある？」
「５つじゃ」
「分かった。今考える」
　俺は転生先の事を考えて、特典を考えた
「決めた。これにする」

　１つペルソナ３とペルソナ４とペルソナ５にある、ペルソナが全て乗っている全書を受け取る
　２つペルソナ全書にあるペルソナのレベルは９９にする
　３つ相手にペルソナを渡すことが出来る、または全書のペルソナを手持ちペルソナに変更することが出来る
　４つペルソナの出し方はペルソナ５の仮面を取ってペルソナを出す
　５つペルソナを出す技を出さずに自分の技を使うこともできる
「以上だ」
「凄いチートじゃのう、お主努力はせんのか？」
「当たり前だ、しない」
「あっそう・・・・まあできないわけではない」
「じゃあ今すぐできるか？」
「あーうんまあできるじゃろう」
「そろそろ転生させるか。始めるぞ」
「頼む」
「それじゃあ・・・・これじゃ!!」
　パチンと指を鳴らし転生っさせた

　俺は目が覚めた。
（此処は・・・・転生できたのか？……ん？この服装は
　ペルソナ５の主人公の服装じゃないか、カッコいいなこの服装。
　まるで、怪盗の姿だ、ちゃんと仮面はあるな）

俺は後ろに振り向いたそしたら大きな門があった
もしかしてボス部屋?、なのかな?だったら早く攻略するか
俺は後ろの大きな門を開け、ボス部屋に入った

俺はボスの部屋に目の前を見たそこには
デカいモンスターが現れた神様が日本字に見えるように改造してくれたおかげで名前が解る。
名前は≪イルファング・ザ・コボルドロード≫が天井から姿を現した。
それに続くように、下っ端の≪ルインコボルド・センチネル≫が現れた

「さあーて、始めるか」
俺は仮面に手を出して言葉を言った

「ペ」

「ル」

「ソ」

「ナ」

そう言い俺はかぶっている仮面を取った
そしたら、俺の体は燃えて炎の中に飲み込まれた。
[まずは私を呼び出すとはな
いいだろう我の炎で敵をを滅ぼそうぞ
〃 我は汝、汝は我・・・〃

魔物よ、我が正義の炎で焼かれるがいい!!」

その言葉が終えた後ペルソナが現れた、オルフェウスでもイザナギでも無い、普通に手
ウリエル
に入るペルソナが現れた
「ウリエルよ、敵を蹴散らすぞ」
俺は剣を持って相手に向けた
「大炎上!」
俺はそう叫ぶウリエルが剣を構え上に付きだした
そしたら、下からマグマが出てきてモンスターを飲み込んだ
だがボスモンスターは違うギリギリ回避できたらしい
「なら、俺が相手になってやるよ」
俺はそう言い仮面をかぶってウリエルを戻した
そしてボスモンスターに向かった
素早い斬撃でボスモンスターに切りつ付けて、自分の特技を使った
「一刀…両断!!」
そう言いボスモンスターを真っ二つにした
ボスモンスターは消えて目の前にクリアと書かれていた
そうだ、俺は勝った、やはりペルソナの力は面白すぎる
「…なんでや!!」
ん?この声は…なるほど、早く決めていた方が良かったようだ…まあいい、ディアベルは死なずに済んだしキリトはビーターにならなかっただけでもまだましか。
振り向かずこのままにしていたら顔は見えないか、いや、そもそも仮面付けているしばれないか、振り向かず答えるか
「…どうした?勝手にクリアされるのが嫌だったのか?」
「ジブンは仲間を犠牲にさせてクリアしたんだろうが!」

「犠牲？…フフ、フハハハハハハハハハハハハっっ!!!、犠牲だと？笑わせてくれる」

「な、何やと!?」

「お前たちは大きな勘違いをしている。俺が仲間を犠牲にすると思うか？」

「ど、どういうことだよ!?」

「俺は一人で挑んだんだよ!!、誰ひとり協力なしで、俺だけのスキルで倒しでボスを倒したのさ!!」

「な、なんだよそれ…そんな、そんなの…」

「もう、チートや！チーターやん、そんなの!!」

「もう終わりか？会話してくるのは？そろそろ俺は次の階層に進むからな、じゃあな、素人」

俺は歩いて部屋の奥にあった階段を上がり切ろうとしたら

「待て！」

この声は、キリトだな、話すか

「何の用だ」

「君はあのスキルは何なんだ？」

何だそんな話か、こう答えるか

「…ペルソナ」

「ペルソナ？」

「もう一人の自分と向き合ったら現れる心の力だ」

「心…？」

「話は澄んだな、そろそろ次の階層に向かう、ここでお別れだ、またどこかで会おう」

そう言い俺はアインクラッド第一層の扉を開き中に入った

逃げ出さない1人の神
月夜の黒猫団　ｐａｒｔ１

俺は第1層フロワボスを1人で倒したから、謎の存在ファントムと呼ばれる事になったファントムと呼ばれる原因は黒いコートを着ていてで顔も解らない幻影と呼ばれる意味で
ファントムと呼ばれる存在になった
でもそれは、都市伝説の話だけど、確かに俺がファントムだからその話は本当だ。何故なら
俺がファントムだからだ
で、今頃

「我ら月夜の黒猫団に乾杯、でもって命の恩人のシュウさん乾杯!!」
「「「乾杯!!」」」
「乾杯……」
何故か5人のパーティーがピンチになっていたので助けるとお礼と言って連れてこられた
「ありがとう、本当にありがとう!私すごく怖くて……助けに来てくれた時本当に嬉しかった!」
青色の髪をした少女サチが涙を流しながらお礼を言ってくる
「大変失礼なんですが、シュウさんのレベルを教えてもらえませんか？」
黒猫団のリーダー：ケイタがレベルを尋ねてきた。
「２０ぐらいかな」
「凄いですね。そのレベルでソロだなんて」
「敬語は止してくれ。それにソロって言っても効率は悪い」
そう言うとケイタは敬語を止めた
「そうか。それじゃあシュウ。もしよかったらウチのギルドに入らないか?」
「それじゃあ、仲間に入れてもらおうかな」

よし、これで、この人たちの命は何とか救える！

それから1か月がたった

≪月夜の黒猫団≫は徐々に力を上げ最前線の７層分下でも十分に戦えるまでになった

ただサチはいまだに怯えている

片手剣の熟練度もそれなりに上がり、レベルも安全マージンをしっかりとってある

それでも、モンスター相手に怯えてしまう

こればっかりは、どうしようもない

今日の狩りを終えるとケイタは皆を宿屋に集めた

「実は、今日の狩りでなんと２０万コル貯まりました。それで僕たちのギルドホームを買おうと思うんだが、どうだ？」

「おぉ、いいじゃねーか!!」

「いいね！いいね！」

家を買う話で皆は大盛り上がりだ。やっぱりこの雰囲気はいいな

「なぁ、サチの装備を整えるのは？」

ササマルがそう提案してきた

「え？別にいいよ」

サチが弱そうに言う

「遠慮すんなって」

「いつまでもシュウに前衛任せるわけにはいかないだろ」

「でも…」

そう言うサチの顔は明らかに曇っていた

話し合いの結果、ギルドホームを買うことになった

皆が寝静まった頃を見計らい俺はある場所に向かった

そう。ベルベットルームへ。

俺は目を覚めたら俺は椅子に座って入れ、大きなエレベーターに乗っていたどうやらペルソナ３のベルベットルームのようだ

「ようこそ、我が…ベルベットルームへ」

どうやらベルベットルームはペルソナ３だ

「イゴール、単刀直入に1つ言う、ペルソナを取出しをお願いする」
「よいでしょう、ペルソナをを1つ取り出してあの人に渡すようですね」
「ああ、お願いできないかな？」
「いえ、貴方のその望み、叶えてやりましょう」
　そう言うとイゴールは手を拍手し空からペルソナカードが落ちてきたそれを俺は受け取った
「ありがとう。イゴール」
「いえ、これぐらいはサポートをしていますから」
「そろそろもう、元の世界に帰らないといけなくなったようですな」
「ありがとう、イゴール」
　そう言うとすぐに切り離されて元の世界に戻った
　戻った時、ケイタからメッセージが届いた
『サチが宿から居なくなった。僕たちは迷宮区の方を探してみる。シュウも探してくれ』
　ケイタからのメッセージを見て、ペルソナ5の愚者のコープアビリティ能力を発動した
　これでサチを探した。サチはこの町に居た、俺はその場所に向かった

「サチ」
「シュウ!?、どうしてここか？」
「カン…かな」
　本当の事を言えるわけでもないのでそう言って誤魔化す
「そっか」
「隣…いいか？」
　サチに聞くとサチは頷いた
「一緒に戻ろう。皆、心配しているよ」
「シュウ。一緒に逃げよう」
「逃げるって何処から？」

「モンスターから、ギルドから、…この世界から」
　その言葉に冷や汗が出た
「それって、本心？」
「はは…それもいいかもね。…ゴメン。嘘。死ぬ覚悟があるなら此処にいないよ
　……最近、死ぬのが怖くて寝れないんだ。どうして、こうなっちゃったのかな？
　なんで、ゲームで死ななくちゃいけないの？こんな事に何の意味があるの？」
　サチは涙をながらにそう訴えた、サチはずっと苦しんで怯えていたんだ。だが、それを
　仲間に打ち上げられずずっと隠してきた
「サチ、ゴメン、気付いてあげられなくて…ゴメン」
　俺はサチに謝罪をした。サチは驚いた顔をして見ていた
「シュウが謝る必要は無いよ私の方こそゴメン。宿から抜け出して、皆に迷惑かけて、
　こんな愚痴みたいなこと言って。聞いてくれてありがとう。戻ろう」
　サチが立ち上がる、俺はサチの手を掴んだ
「シュウ？」
「サチ、俺でよければいつでも愚痴に付き合う、それに・・サチが望むなら無理剣士を
　しなくていい俺の分まで頑張る」
「…ありがとうシュウ。いつまでも、皆におんぶ抱っこじゃいけないから、だから、これからもよろしくお願いします。シュウ」
　サチはニッコリと笑いそうに言ってくれた
「そうだ、これをあげるよ」
　そう言うと俺はアイテムボックスから1枚のカードを取り出した
「それは何ですか？」
「お守りだよ、自分と向き合えばそのお守りの効果を使うことが出来るアイテムなんだ」

「でも、それ、レアアイテムじゃないの？」
「普通のアイテムだけど、役にたつアイテムだよ」
そう言ってサチにカードを渡した
サチはそのカードの効果を調べてみたが???だけだった
「これ？何のアイテム？」
「きっとわかるよ、じゃあそろそろ、皆の所に行こう。サチ」
「え？あ、うん」
そう言って皆の所に向かった

そう
そのあげたカードが
1人増えるとは
サチは解らなかった

月夜の黒猫団　ｐａｒｔ２

「それじゃあ、行って来るよ。…転移≪はじまりの町≫!!」
　翌日、ケイタはギルドホームにする家を買いに行くために≪はじまりの町≫へ向かった
「いよいよ、家を買うのか…」
「なんかさ、こういうのってなんか良くね？」
「おやじ臭いんだよ！」
　ササマルとダッカーがふざけ合っていると、こんな提案がでた
「なぁ、１つ上の層でさ、金稼がね？」
「おっ、いいな。」
「１つ上なら早く稼げそうだな」
　コルを稼ぐのはいいが、１つ上にあがるのはな
「いつもの狩場でもいいだろ？」
「大丈夫だって、俺らのレベルなら行けるよ」
　そう言われ１つ上の層に上がることになった
　この１つ上の層はコルを稼ぐにいいがトラップ多発地帯で慎重にいかないと行けない
　まぁ、いざと言うときは使うか
　ペルソナを

　レベルも十分にあり、狩りは順調に進み、コルも目標金額に達し街に戻り
　ギルドホームに使う家具を買うことになった
　しかし、帰り際に隠し扉をダッカ―がソレを見つけた
　声を聴かずに
　開けた瞬間にアラームが鳴り、隠し部屋の扉が閉まった。壁が開き、中から……!!?アイアンゴーレムじゃない!!ペルソナ５のベリスだ!!。しかも数が多い、レベルは弱いがシャドウはペルソナで戦うしかない、仕方がない言うか
「サチ、今からサチ自身と向き合う時だよ」

「え？」
「いいから、今言った言葉を頼りに、自分の心底にある、自分を受け入れるんだよ」
「わ、わったよ」
そう言われ私は自分の心の中を考えた。私はずっと逃げてきた、…でも私はもう、逃げない!!

［ようやく、目が覚めたようじゃな］
「うっ?!!」
サチは急に頭を押さえ急にうなされ始めた
他の皆は声が聞こえないようだ
［逃げ出しても、仲間を見捨てられない、仲間は大切な存在だ、なら我がそなたに力を貸してやろう
我は汝、汝は我…,
その1言でサチの顔にいつの間にか、仮面がつけられていた
我の力で、敵を蹴散らそうすぞ!!。さあ仮面を取れ!!］
「うん、わかったよ…来て、オーディン!!」
仮面を取ったら強い衝撃波が出てベリス達が何体か消えた。でもまだ残っている
衝撃波波が終わってサチの姿を見たその時、服装はベルベットルームのエリザベスの服装に黄色のカラーリングと少し青いカラーリングが出来ている帽子は被っていないけど
俺があげたペルソナは、皇帝最強カード［オーディン］のペルソナカードをサチにあ
げたのだ。
ちなみにイメージは女神転生４ファイナルのオーディインの姿にしています
他の俺以外の皆は大きく驚いた、急に服装が変わったり、後ろにモンスターみたいなやつがいた
「これは!!?」
「どうだ？その力は」

「シュウさん!?このスキルは!?」
「さっきあげたカード覚えている？」
「カード？…もしかして!!?」
「そのまさか、それが俺が渡したアイテムの効果だよ」
「え!!?」
「そのアイテムの名前はペルソナと言って、自分の心の中の自分がもう1人の自分が隠れていて、そこに自分の心が表に出てきたときその力が手に入ることだよ」
「そうなんですか？」
「それより、あれ、数が多いけど大丈夫か？」
「正直、まだ難しいです」
「だったら、手伝うよ。俺もその力を手に入れていますから」
　そう言うと俺の体から青い炎が俺の体に出てきて、一瞬で消えたその時俺の服装はペルソナ5の主人公の姿になった
「その姿は!?」
「これが本当の姿だよ、さあ、早く敵を撃破しますか」
　そう言うと俺は仮面に手をかけた
「こい、メタトロン!!」
　そう言って仮面外すと全身機械だらけの姿をした天使が現れた
「さあ、はじめよう」

月夜の黒猫団　ｐａｒｔ３

俺は剣を抜いた
「サチ、準備はいいか？」
「うん、行けるよ」
「なら始めるか、メタトロン!!メギドラオン!!」
そう言い剣を相手にかざしたその時、メタトロンは手を空に向けた
そしたら空から眩しいビームが落ちてきて落ちたところから大きく膨らんで爆発した。
そして何体かは消滅した
「凄い!!今のは?!」
「メギドラオン。最上級の万能能力魔法、そっちにもちゃんとそのスキルが入っているはずだよ」
「え？」
「つまり、仮面を外れている状態で相手にメギドラオンと言えば俺が唱えた魔法と同じように使えるはずだよ、ただし魔法やペルソナの攻撃これは自分にも負担がかかるから気を付けて戦わなくてはいけない」
「分かった」
俺がサチに色々な戦いの説明をしていて、色々無双し続けて、いつの間にか敵は1体だけになった
「サチ、体に負担はかかっていない？」
「大丈夫だよ、これで最後だね」
「ああ、[待ってくれよ～」ん？」
ベリスは俺たちに近づき命乞いをしてきた
「シュウ？これは？」
「そういえば、説明がまだだったな、今そいつの名前はシャドウと言って人の心の底に潜む化け物だから、人の感情がある化け物なんだよ、時には命乞いとかしてほしいのは
ちゃんと心がある存在なんだよ」
「そうなんだ」

「ちなみに、そいつも、ペルソナだよ」
「え!?…ペルソナは人の心の底にあるもう1人の自分じゃないの？」
「何でか、まあ、俺にも解らない、」
「それで、このシャドウは、どうするの？」
「まあ、力を貸してくれ、と言っておけば、いいことがあるかもしれないぞ？」
「力を貸してくれ？…分かったやってみる。力を貸してください」
［嬢ちゃんは、優しいね……はぁっ!?そう言えば俺は人の心の底に生きていたんだ!!］
［我は汝、汝は我、俺はベリスっと言うんだ、今後ともヨロシクな!!］
そう言ったシャドウは突然仮面となった
「え!?これは!?」
「さっき行ったはずだぞ、シャドウはペルソナの一種だから自分の存在が解れば仮面となって、相手にペルソナが手に入る効果なんだ、…それで、仮面になったそのペルソナ
あげるよ」
「え？…いいの？」
「うん、サチならさらに使いこなせるはずだよ」
「…じゃあ、貰おういかな、それでどうやってペルソナを貰うの？」
「普通に手で取って仮面に被ればそれでいいよ」
「分かった」
そう言いってサチは仮面に手を伸ばして手にいてた仮面を二重に重ねて青い仮面はサチの仮面の中に入った
「トラップは、解除したようだ、そろそろ町に戻ろう」
「うん、解ったよ」
そう言い俺はまた普通の服装に戻った
「それ、解除できるの!?」
「ああ、それと2つ言い忘れていたが」
「え？、何？」
「それ、似合っているよ」
サチは自分の服装を見たサチは突然恥ずかしそうな顔をしていた

「解除の仕方は普通に、心の中で解除と、頭の中で答えたらすぐに元の姿になるよ」
「そうなの？解った」
　そう言ってサチは頭の中で解除と考え元の服装に戻った
「どうやらうまくいったようだ、そろそろ町に戻ろう」
　そう言いサチ以外は皆ポカンとしていたが我に戻った
「シュウ!!、今のはいったいなんなんだ!?」
「ん？…ああ、ペルソナか、心の中にある自分だよ」
「答えになってない!!」
「帰ったら、解りやすく教えるよ。サチ、行こう」
「うん、解った」
　俺達は町に戻った

月夜の黒猫団　ｐａｒｔ４　ＦＩＮＡＬ

「お前ら!!どこ行ってたんだ？心配したぞ」
「悪い！悪い！１つ上の層に行っていたんだよ。金稼ぎにな」
　皆は今日、生きて帰れた事に喜びを感じている
「おい!!シュウあれの事教えてくれるよな!!」
「……ギルドホームに帰ってからな、尾行されたら大変だ」
「なんでだよ！」
「俺のスキルをここで明かすか普通、もし誰かに聞かれて情報を聞かれたらどうする？」
「う、解ったよ」
　ギルドホームに付いた。俺は椅子に座った。そして他の皆は俺に目を向けてきた
「じゃあ教えるよ、俺の力と、俺の正体を」
　俺は殺気を放った。他の皆は怯えた
　俺の正体を全て押してた（転生したこと）までは話さなかった
　皆は大きく驚いたのは俺がファントムであること、そして、ペルソナの力を
「え～と？つまり…どういうこと？」
　ペルソナの力の事をまだわからないようだ
「まだペルソナの力の事を解らないのか？」
「大丈夫、私が話しておくから」
　サチはケイタにペルソナを説明した
「なるほど、大体は解った」
　ケイタは納得がいったようだ
「ケイタ、頼みがある、俺は≪月夜の黒猫団≫を抜ける」
　俺の言った言葉に皆息を
「……解ったよ。シュウ。脱退を認めるよ」
「シュウ。……お前はもう俺達の一員じゃない、でも、俺達の友達だ、いつでも遊びに来てくれ」
「今度は最前線で会おうぜ」

「いや、そこはボス戦にしようぜ」
「今までありがとう。これからも、よろしく」
ケイタ、ササマル、ダッカー、テツオ
「シュウ、私たちはいつまでも友達だよ。次は、一緒に戦えるように頑張るから
それまで、さようなら」
サチ
「……これ、渡しておく」
1枚の紙をテーブルの上に置いた
「これで、さようなら、どこかで会おう」
そう言い俺はギルドホームを出た

ルート変更
「にしても、シュウの奴、滅茶苦茶なチートスキルを持っているな～少しは欲しかった」
「ケイタ、でもあの力、本当に凄かったなあ」
「そういえば、サチもその力を持っていたよな」
「そういえば」
他の皆はサチの方を見た。サチは慌てていた
「あれは、シュウから、貰ったんだよ」
「でもいいよなあ、サチだけチートスキルが使えて」
「そうだよなあ。そういえば確かシュウが紙を此処に置いていたよな、見てみるか」
「うん」
皆は俺が書いた紙を皆で見た、そしたら
「……サチも無茶苦茶だな」
「うん」
「これは、酷過ぎる」
俺が書いた紙はサチがペルソナで使うステータスだった確かにスキルが酷い
ペルソナ：オーディン

ペルソナの使う技と魔法
技：グングニル：相手は斬撃無効や斬撃吸収があるモンスターはこの技を無効にする
：コンセントレイトこの技は自分の魔法を大幅にアップする、しかしこれを使って
魔法を唱えたらコンセントレイトの効果は消える
：チャージ：自分の技を大幅にアップする、＝これは→から一番目のデメリットと同じ
魔法：真理の雷：この魔法は槍を相手に投げて地面に刺さったらいきなり雷を相手1体、感電することがある
：エル・ジハード：大雷が空から降って相手全体に電撃ダメージを与える
：メギドラオン：空からビームが降ってきて地面に付いたらそこから大きく膨らんで爆発する、大きく膨らむ状態でも言痛すぎる
：ランマイザー：相手全てのステータスを大幅に下げる
：メシアライザー：死んでいる状態でも仲間全て生き返らせ、仲間の状態以上の仲間をなくすことが出来る
「本当に滅茶苦茶だね…これは？」
最後にページにこう書いてあった
余り使いすぎるなよ、茅場晶彦にこのスキルがばれる、これは奥の手に使うことだ
「ありがとう。シュウ

取り戻す、一人の勇者
ピナの心　ｐａｒｔ１

　此処は何層か分からないが、今は森にいる、……一体何処の森なんだろう？……一人の女性が危ない!?助けに行こう!!俺は走って女性にの所に向かった３体のサルをピックでサルに投げる、それなら怒りでターゲットは女性より俺に変わったようだこれなら本気で戦える
　俺は黒いタガーで瞬殺でサルを撃破して、女性の方を向いた
「……ピナっ…!!」
　どうやら、間に合わなかったようだ。すまない
「……ごめん。もう少し、俺が早く来てれば助けられたのかもしれない」
「…いえ、これはあたしのせいですから」
　俺は女性の手を見た、それは魔物の羽だった。これは、魔物の羽？だったら心と言う名前が入っていたら蘇生はできる筈
「その羽、アイテム名、設定されているか？」
　シリカは、地面に落ちている水色の羽に目を向けた。確かに心が入っているこれなら
「まだ諦めるのは早い、君の仲間を生き返らせる方法はある」
　俺はシリカにできるだけ役に立つ武器をシリカにあげた。それでシリカはシュウが何故そこまで自分のためにしてくれるのか分からず、警戒していた
「笑わないないなら言うよ」
「笑いません」
　シリカは真剣な顔でシュウを見ていた
「…１人の友達に、よく似ていたから」
　その言葉で思わず笑い堪える事が出来ず、シュウを信じてみようと思っていた
　シュウは一時的なパーティを組むことになった。目的は、使い魔蘇生用アイテムの取得

ちなみに現在はシリカが教えてくれた店に足を運んでいる
「ここのチーズケーキが結構いけるんですよ」
宿に入ろうとした時、ふと隣の道具屋からの一組のパーティーが姿を現す
その集団の中、一人の女性プレイヤーの瞳がシリカを捕えた
「あら、シリカじゃない」
その顔を見てもシリカの顔が曇った
「……どうも」
「へぇーえ、森から脱出できたんだ。良かったわね」
ピナが死ぬ前、喧嘩していた女性プレイヤー、ロザリアだった
「でも今更帰ってきても遅いわよ。ついさっきアイテムの分配は終わっちゃったわ」
「要らないって言ったはずです！ーーー急ぎますから」
会話を切り上げようと、シリカは歩を進めようとする
だが、向うは一つ気が付いたようで、再び声をかけた
「あら？あのトカゲ、どうしちゃったの？」
思わず口をつぐみ、悔しさで唇を噛む
「あらら、もしかしてぇ……？」
「死にました……。でも！」
キッっとロザリアを睨み付ける
「ピナは、絶対に生き返らせます！」
「へぇ、てことは≪思い出の丘≫に行く気なんだ。でも、あんたのレベルで攻略できるの？」
「そろそろ行くぞ、長居している暇は無い」
その一言を言って、俺は宿に向かうが、シリカは、ハッ！っとビックリしてシュウについて行った
「ま、せいぜい頑張ってね」
宿屋へ向かうシュウ達にロザリアの笑い声を含んだ声が背中を叩いたが、振り返ることは無かった

そう言えば、先程まで沈みきっていた気持ちが、ゆっくり溶きほぐ

されているような感じがした。
だけど、その暖かさを惜しむようにシリカは視線をテーブルに落とし、ポツリを呟く
「……なんで……あんなに意地悪言うのかな……」
その一言でシュウは真顔になる、カップを置き口を開いた
「どんなオンラインゲームでも、キャラクターに身をやすやすと人格が変わるプレイヤーが多いんだ。でも、このＳＡＯの場合ははっきり言って異常だと思う。プレイヤー全員が協力してクリアを目指すのは不可能かもしれない。でも……」
シュウは息を一瞬止め、言葉を切るとシリカに目を向けた
「他人の不幸を喜ぶ奴、アイテムを奪う奴、――殺してしまう奴が多すぎる。俺は、ここで悪事を働くプレイヤーは、腹の底から腐った奴だと思える」
吐き捨てるように言ったシュウの目は、怒っていた
「…俺だって、人の事を言えた義理じゃない。人助けなんてろくにしなかったこと無かった、それに……」
ギリっとシュウは唇を噛み締める
「……どんな世界でも、腐った奴が多くいる、ってことだ」

ピナの心　ｐａｒｔ２

第四十七層　主街区　≪フローリア≫
そのゲート広場は無数の花々詰め尽くされていた
円形の広場を細か通路が十字に貫き、それ以外の場所が煉瓦で出来た花壇となっていた
「うわぁ……！」
「ああ、此処は街どころか階層のいたるところが花だらけなんだ」
シュウがシリカの隣に立ち、周り全体を見渡すように言う
ふと、シリカは周りを見渡してみると、花壇の間の小道を歩いていると男女二人連ればかり
皆しっかりと手を繋ぎ、あるいは腕を組んで談笑している。どうやら此処はそういうスポットになっているらしい
「（あたしたちは、どう見えてるのかな……）」
明らかに年上だが、女顔のプレイヤー
側から見れば兄妹にも恋人にも見える
そう考えると、顔の温度が上がり火照ってくるのが分かる
「どうした？」
「い、いえ、何でもありません。さぁ、フィールドに向かいましょう」
「あ、ああ」
「（そういえば、シュウさんから貰ったカードは何でしょう？）」
シリカはそんな事考えると、昨晩の事を思い出した

食事を終えたシリカは、客室で下着姿でまどろんでいた
新しい短剣でのスキル復習をし、眠ろうとしていたとき、なかなか寝ずけないまま天井を見つめていた
ピナが居た時は、毎晩抱いて眠っていたので広いベットが心細く感じる
ふと、隣の部屋に繋がる壁をじっと見つめる。
隣の部屋にはシュウが泊まっているはずであった

もう少し話してみたい
ふとシリカはそう考えたが、瞬間的に胸の痛みを感じた
胸の痛みの正体…
シリカはシュウの隣で、彼の事を考えていた
コンコン
「……!?」
突然のドアがノックされた事に、まどろんでいたシリカの頭が覚醒された
「シリカ、少しいいか？」
扉の外から、シュウの声が聞こえた
シリカは急いで装備メニューからチュニックを身にまとうと、扉を開ける
「あ……シ、シュウさん……あの…ど、どうかしたんですか？」
焦る気持ちと、慌てた口調でシュウに言うが
「どうかしたの？声がガクガクだぞ」
「い、いえ、大丈夫です」
「……まあいいか、それよりシリカ、四十七層へ向かうとの事。少しでも情報を共有しておいた方がいいと思って」
「い…いえ、そう言う事なら。あの――――――よかったら、お部屋で……」
シリカはそう言うとシュウを中へ招き入れた
「悪いシリカ…夜明けに話そうだなんて。俺もそこまで大袈裟だと思っている」
「い、いえ、大丈夫ですよ…あ……あの！はじめませんか」
「あ…ああ、悪い」
シュウは水晶玉を取出し、それを実体化させホログラフィティックの地図出現させた
指先を使いながら地理の説明、そしてモンスターの説明を始めて、終わった後シュウが
「……そうだ、シリカ」
「なんでしょうか？」

「これ、あげるよ」
　そう言いシュウはアイテムボックスから1枚のいカードを取出した
「それは、なんですか？」
「お守りだよ、でもただのお守りじゃない、自分と向き合えばそのお守りの効果を使うことが出来るアイテムなんだ」
「普通のアイテムだけど、役に立つアイテムだよ」
　そう言ってシリカにカードを渡した。シリカはそのカードを調べてみたが???だけだった
「きっとわかるよ、じゃあそろそろ、部屋に帰るから、お休み」
　そう言ってシュウは自分の部屋に帰って行った
「これは、なんでしょう？」
　シリカはカードの事を考えていた

ピナの心　ｐａｒｔ３

「シリカ？」
「！……は、はい!?」
　シュウに声をかけられ、シリカは意識を戻される
「大丈夫？なんかぶつぶつ言っていたけど」
「だ、大丈夫ですよ！」
「ならいいんだが」
　使い魔を蘇生するダンジョン、思いでの丘は、四十七層南部に広がる草原に走る、ほぼ一本道の単純な構造をしている。それ故に道に迷う可能性は皆無だが、代わりにポップするのは強力で醜悪なモンスター揃いであり、女性プレイヤーがあまり近寄りたがらない危険なスポットなのだ
「きゃぁぁあっ！し、シュウ、助けて！見ないで助けてぇっ！」
「……ハァ」
　ダンジョンに入って早々、食虫植物系モンスターの触手によって吊るし上げられる。シリカ真っ逆さまに吊るされているせいで、スカートが下がりそうになっているのを左手で押さえ、右手に持った短剣を振り回している
「…仕方がない」
　シュウは溜息を一つ吐くと、目を閉じたまま腰にあるタガーで、モンスターの元へ走り出す
「……はぁっ！」
　人食い花に捕まっているシリカを助け人食い花を倒し、シリカを助けた。お姫様抱っこで助けた
「し、シュウさん!!」／／／
「どうした？」
　シュウは、シリカを地面に降ろした
「うぅ……すみません」
「気にするな。自分がやっただけだ」

「あの……やっぱり、見ましたか？」
「……最終的に目を瞑った」
「えぇ!?でも、どうやってモンスターの場所を知ったんですか!?」
「それは、あまり話したくない、それより先を進もう」
　此処にいる途中、シュウ達は何度か戦闘行っていた
　≪思い出の丘≫へと到着し、無事に≪プレウマの花≫を手に入れた
シリカは、涙を眼に浮かべながらシュウへと問いかけた
　ようやく長年連れて添ってきた友達と再会出来る
　そう考えると、シリカは弾む胸を抑えきれなかった
「ここはモンスターも多い、町に帰ってからだ」
「はい！」
　シリカは頷くと、メインウィンドウに花をしまう
　アイテム欄に収納されたことを確認するとそれを閉じた
　此処からは徒歩で帰還したが、高価なクリスタルを使うのはギリギリの状況でのみ
　此処はグッとこらえて歩き始める
　息と同じではあるが、モンスターには出くわすことなく街道近くの小川にかかる橋へと差し掛かった
　その時だった
　不意に後ろからシュウの手が肩にかけられた
　一瞬ドキっとしたがシュウの検し医い表情を見てシリカは怪訝になって声をかける
「――そこで待ち伏せている奴、出てこいよ」
「え……!?」
　シリカは慌てて木立に眼を凝らすが、人影は見えない
　だが、数秒が過ぎた後、そこからある人物が姿を現した
「ろ……ロザリアさん……!?なんでここに……!?」
　驚愕するシリカは、思わずロザリアに対して問い投げる
　だが、その間に答えず彼女の唇の端を釣り上げて笑う
「アタシのハイディングを見破るなんて、なかなか高いスキルね。侮ってたのかしら？」

そこでようやくシリカの視線を移す
「その様子だと≪プネウマの花≫をゲットできたみたいね。おめでと、シリカちゃん。じゃ、早速その花を渡してちょうだい」
「……!?な……何を言っている……」
その時シュウが前に歩み出る
「そうはいかないな。オレンジギルド≪タイタンズハント≫のリーダーさん」
瞬間、ロザリアの肩が跳ね上がり、笑みが消えた
シリカはロザリアのＨＰカーソルを確認する。だが、
「え……でも……だってロザリアさんは、グリーン」
「オレンジギルドと言っても、全員が犯罪者カラーではない、グリーンのメンバーが獲物を見繕ってパーティーに潜伏、待ち伏せしていることに誘導する。昨日盗聴してやがったのはあいつの仲間だ」
「そ……そんな……。じゃあ、この二週間一緒のパーティーにいたのは……」
「そうだよォ。あのパーティーの戦力評価すんのと同時に、冒険でたっぷりお金が貯まって、おいしくなるのを待ってたの。本当なら今日にでもヤッちゃう予定だったんだけどー」
シリカの顔を見つめながら下で唇を舐める
「一番楽しみな獲物だったアンタが抜けちゃうからどうしようかと思ってたら、なんかレアアイテム取りに行くって言うじゃない≪プネウマの花≫って今が旬だから、とってもいい相場なのよね。やっぱり情報収集は大事よねー」
そこで言葉を切り、シュウに視線を向けた
「でもそこの黒い騎士サン、そこまで解ってながらノコノコこの子に付き合うなんて、馬鹿？それとも本当に体でたらしこまれちゃったの？」
ロザリアの屈辱にシリカの視線は赤くなるほど握りを感じていた
短剣を抜こうとしたが
「馬鹿はどっちだ？」
その言葉でシリカは怒りが無くなってシュウを見た

「なんですって……」
　殺気を押し出しながら、ロザリアへと問いかける
「聞こえなかったのか、馬鹿はどっちだよ、相手になっても勝てない相手に」
「何よ、マジになっちゃって、馬鹿みたい。それより、自分達の心配をした方がいいんじゃない？」
　そう言い終えると同時に、ロザリアが指を鳴らす。それを合図に、並木の影からぞろぞろと現れる人の影。その数、７人。いずれもオレンジカーソルの犯罪プレイヤーでありながら
「し、シュウさん！人が多すぎます！脱出しないと……！」
「大丈夫、俺は強いから。君はクリスタルを用意してそこで待っているんだ」
「えっ！で、でも……！」
　自身を心配して制止しようと声を上げるシリカに背を向けて、橋の中央まで歩き出して止まると
「どうやら、説得しても投降するつもりは無いか」
「八ッ！何でそんなことしなきゃならないのよ。あんた、状況分かってるワケ？それとも、この人数相手に、本気で勝てると思ってるの？」
「どうやら、交渉決裂、いいだろう、本気で行かせてもらう……!!」
　俺の体に青い炎が俺の体を包み込んだ。この時俺以外の皆は大きく驚いた人が勝手に燃えたから。そして火が消えたら黒いコート、仮面、左腰に刀、黒いブーツ、手には赤いグローブを着けていた、そう、噂のファントムになったのだ
「さぁ、何処からでも、かかってこい」